

私のはんせい記

～「改修設計」事始め～

建築家 三木 哲

● 古民家再生

東京・新宿の地下街などにホームレスの段ボールハウス群が出現した頃、持家政策が推進され、都市近郊では住宅展示場がつくられプレハブメーカーが競ってモデルルームを展示した。

一方、地方農村部では急激な過疎化が進行し、空家・廃屋が増加していった。

太い大黒柱や小黒柱に2尺以上の差鴨居をかけ渡した立派な古民家が空家や廃屋になっていく。

建築後百年近く経年していても、柱・梁・桁・差鴨居などの構造材は健全で、まだまだ使える。

1988年、岡山・倉敷を活動拠点とする6人の建築家：神家昭雄、矢吹昭良、佐藤隆、萩原嘉郎、樫村徹、大角雄三たちが建築家集団「古民家再生工房」を結成し活動を開始していた。

「古い民家をモダンリビングに！」をテーマに1999年までに200軒以上の民家を再生していた。

民家の持っている特質や良さを十分に生かしながら、新しい機能や現代的な感覚を加えることで、使われなくなった納屋や蔵、ごく一般的な古い民家に新しい命を吹き込み、現代住宅として甦らせ、使いながら次の時代に残していく。古民家再生工房の活動は、極めて新鮮で刺激的であった。

1999年、住宅再生分科会は日本建築家協会の広島大会で「中国地方の古民家再生事例発表会」を企画し、岡山・倉敷から古民家再生工房の樫村氏、山口県で古民家の改修を手掛ける今村さん、鳥取県で活躍する建築家の民家改修事例などの素晴らしい話が聞けた。

この年、古民家再生工房は、長年の活動が認められ「日本建築学会業績賞」を受賞した。

プレハブメーカーは、大工の棟梁や熟練した職人の技量を排除し、手間を省き均質な住宅を素早くつくる。大工や職人の技や技量を極力削減することを目的とする。この結果、型枠大工の様な単純労働の職人しか必要とされず、住宅メーカーの職人はノミやカンナも使えなくなる。



伝統的技法を継承する千葉県外房・外川の大工の仕事
住宅建築記載「飯岡の家」

一方、日本で伝統的につくられてきた民家は、構造材の仕口や継手を、厳しい徒弟奉公で棟梁や親方から学び継承されてきた伝統的な技術の結晶である。古民家再生の仕事はそれに携わる大工や職人により日本で伝統的に継承されてきた技能・技術を継承するものとなる。

伝統的技術は、法隆寺以来、営々と築かれてきた日本の建築文化を次代に伝え、数百年の耐久性が得られてきた、日本の木造建築技術に向かう。

日本建築家協会・住宅再生分科会は、広島大会で得られた教訓をさらに展開する方向性を得た。

関東甲信越支部傘下の建築家による古民家再生の取り組みを強化した。

建築家：新居誠之氏の日本民家再生協会の事業、建築家：長谷川敬氏の群馬養蚕農家、建築家：須田氏、長野の建築家：川上恵一氏、小山北桜高・岡田教諭による那須・青木周蔵別邸修復事例、建築家：日影氏の「モダン洋館再生事例」、建築家：中善寺紀子氏の「よみがえる民家事例集」、建築家：吉田桂二氏や、建築家：植木秀親氏、建築家：石川正三氏の事例など。

2000年には、日本建築家協会・鎌倉大会で「住宅再生セミナー」を開催するに至った。

一方、それまでマイナーな「住宅リフォーム」と言う実践活動は、2002年(平成14年)4月から、毎週日曜日、朝日放送で放映を開始した「劇的ビフォーアフター」により脚光を浴びた。所ジョージが出演するその番組は、住宅の「リフォーム」が一般化する契機をつくった。

そして2005年、メンテナンス部会の下部組織としての住宅再生分科会を、独立した組織「住宅再生部会」とした。

みき・てつ

(有)共同設計・五月社一級建築士事務所顧問。1943年生まれ。建築家がメンテナンスを手がけることなど考えられなかった時代から「改修」に携わり、30年以上にわたって同分野を開拓し続けてきたバイオニア。